

[海外の動向]

「第9回中国語用論シンポジウム」

余 維

中国語用論学会と復旦大学外国語学院が共催した「第9回中国語用論シンポジウム」は2005年7月26日から28日にかけて中国上海復旦大学(日本の京大にあたる)で行なわれた。今回の大会に出席した国内の学者・院生は189人、アメリカ、日本、シンガポールから参加した海外の学者は6人で、合計205人にのぼった。大会は日本電子辞書メーカー(株)カシオの協賛を得た。

大会は、7月26日午前、復旦大学逸夫科学技術館会議ホールで盛大に幕開けした。中国語用論学会会長何自然教授と復旦大学現代英語研究所所長熊学亮教授が開会式の挨拶をし、基調講演として、アメリカの語用論学者 Laurence Horn 教授、I. Kecskes 教授、Chen Rong 教授が、それぞれ、“Speaker and Hearer in Neo-Gricean Pragmatics”、“Contextual Meaning and Word Meaning in Language Use”、“Grice, His Critics and Pragmatics”と題して講演を行った。

今大会のテーマは、主として語用論研究の基本理論、言語行為、談話直示、会話の推意、丁寧さ、認知語用論、応用語用論、異文化コミュニケーション語用論、司法語用論、言語教育と語用論、歴史語用論であった。分科会では、6組に分かれて、「語用論の理論研究」、「言語行為と丁寧さ」、「会話の推意」、「応用語用論」、「司法語用論」、「言語教育と語用論」の研究発表が行われた。研究発表者は192人にのぼった。

大会と分科会を総合すると、以下の二つの特徴が挙げられる。

(1)、今回の大会は中国学者の語用論基本理論研究の成果をよく反映していた。

何自然と謝朝輝の「Language, Memes and Communication」は、言語発展を促進する模倣遺伝子をめぐる新しい仮説を大胆に打ち出し、多くの出席者の興味を引き起こした。徐盛桓の「会話の推意における認知」は、語用論と認知言語学の最新研究成果を取り入れ、認知言語学の視点から、会話の推意に対して新たな解釈を提案した。熊学亮の「関連性理論におけるロジック」は、関連性理論に対して鋭い批判を行った。陳治安の「理性：Grice思想の核心」は、理性を分析の切り口として、Grice語用論思理論基礎に対して分析を行った。洪剛は、“discourse completion tasks”と“role plays”という語用論の2大研究方法について対照研究を行った。張紹傑の「会話推意の規約性(conventionality)」は、規約性に新しい見

解を提出した。冉永平は、当代語用論研究の発展の流れを的確に総括した。

(2)、今回の大会は語用論理論の応用においても多くの成果をあげた。

姜望琪の「談話直示における前方照応」は、談話の主題に対して優れた見解を提出した。陳新仁の「XはYではない」という文型に対する語用論的研究は、相関的メカニズムを記述した。胡庚申は、国際交渉（外交・商談など）における語用論研究の進展を紹介し、同時この分野が今後、中国における発展の見通しを述べた。曲護国は、歴史語用論の観点から“please”の語用論的機能における歴史的発展に対して仮説を提出した。

司法語用論は中国語用論研究のホットな研究分野である。廖美珍の「法廷発話における formulation 現象研究」は、法廷言語の formulation に対して、種類、役割、権力など緒要素の関係をめぐって体系的に検討した。その他、多数の司法関係語用論の研究発表がなされたことも中国例年語用論研究大会の特徴であった。

さらに、今大会は言語行為、言語教育における語用論の応用、丁寧さ (Politeness) などの研究において、最新の成果を示した。筆者は今回の大会で司会を担当すると共に「談話直示の語用論的対照分析」と題して研究発表を行った。

なお、次回の「第10回中国語用論シンポジウム」は2007年に南京大学で開催される予定である。